

Compiled by a disciple called Mawlanā Shaykh
 Edited by Masatomo KAWAMOTO

The 15th Century Central Asian Hagiography Maqāmāt-i-Khwāja Ahrar: Memoirs concerning Khwāja Ahrar (1404-1490)

マウラーナー・シャイフとして知られる弟子 編著
 川本正知 訳注

『一五世紀中央アジアの聖者伝 ホージャ・アフラーールのマカーマート』

今 松 泰

十二世紀以降イスラム世界の各地で形成されたさまざまなスーフィー教団(タリーカ)は、多くの場合、創始者とされる人物の名前を冠して呼び習わされる、教義・修行法・道統を共有する流派・集団であった。各教団は、教団の長たるシャイフへの民衆の帰依によって社会の隅々にまで大きな影響力を有し、またシャイフと為政者との個人的な関係によって、ある場合には政治的にも

大きな力を振るった。教団のシャイフはスーフィーの導師であると同時に聖者としてもひとびとの崇敬を集めたのである。こうした教団のシャイフの事績を書き記すために数多くの聖者伝が編まれたが、それらには、諸教団のシャイフを網羅的に記述したもの、ある特定教団の系譜に連なるシャイフを扱ったもの、あるいはシャイフ一人の生涯・言行を記したものとさまざまなタイプが存在する。伝記ジャンルと密接な関係をもち——ある場合にはその一部をなすともみなされる——、説話との接点をも有する多種多様な聖者伝は、歴史・思想研究の材料として、また文学研究の一資料として利用されてきた。

イスラム世界各地に成立した教団のうち、アブドウルハリーク・グジュドワーニー(ʿAbd al-Khalīq al-Gujdawānī (一二二〇没)の活動に起源をもち、中興の祖とされるバハーウッディーン・ナクシュバンダ Bahāʾ al-Dīn al-Naqshband (一二三八九没)の名を冠して知られるナクシュバンディー教団は、その道統に連なる者たちが、教団勃興の地である中央アジアのみならず、オスマン朝治下の諸地域やインド、東トルキスタンから中国本土、さらにはロシア領内や東南アジアなどさまざまな地域に大きな足跡を残し、今もなお活動を継続している、イスラム史上において——現代においても——大変に重要な位置を占める教団である。それゆえこの教団に関しては、これまでに多くの研究がなされてきたが、日本においては、主に中央アジア史研究の文脈において——とくにティムール朝時代の政治・宗教・社会の問題から——扱われてきた。本書の校訂・訳注者も、聖者伝およびその他の文献を使用して多くのナクシュバンディー教団研究を発表されてい

るが、とりわけ十五世紀中央アジアのティムール朝君主アブー・サイード Abu Sa'īd (在位一四五二—一四六九) とスルターン・アフマド Sultan Ahmad (在位一四六九—一四九四) の治世下に、ナクシバンディー教団のシャイフとして名声を博し、強大な権勢を振るったホージャ・アフラル Khwāja 'Ubayd Allāh Ahrār (一四〇四—一四四九) を中心に据えて研究を進めてこられた。

ホージャ・アフラル研究の基礎資料には、本人の著作、聖者伝、書簡、文書集、系譜・系図などが存在するが、そのうち聖者伝としては、(一) Mir 'Abd al-Awwal Majālis, (二) Muhammad al-Qadrī, *Silsilat al-'Arifin wa Taḥkīrat al-Siddiqin*, (三) Fakhr al-Dīn 'Alī b. Husayn Wa'iz Kashīf, *Rashahat-i 'Ayn al-Hayat*, (四) Mawlāna Shaykh, *Maqāmāt-i Khwāja Ahrār* の四種が知られている^⑧。校訂・訳注者はすでに(一)の聖者伝を紹介するとともに、これを利用した研究を発表しておられる。本稿で取り上げる二冊は、上記四種の聖者伝のうち、(四)の聖者伝の校訂テキストとその翻訳である。校訂には五種の写本(タシケント写本¹、パトナ写本²、イスタンブル写本³、タシケント写本²、タシケント写本³…書写年代順)が使用されている。なおこれまでに出版された刊本には、アーレフ・ナウシャービー、Aḥī Nawshāhīr によって二〇〇一/〇二年に出版された『ホージャ・アフラル資料集』に収録されている校訂版がある。

二冊の構成はそれぞれ以下のとおりである。

(校訂本) 略語、英文凡例、序文、凡例、解題、ペルシア語テキスト、人名索引、地名索引、民族名部族名索引。解題は次のよう

に章分けされている。

- 一 著作名
 - 二 写本
 - 三 刊本
 - 四 編著者
 - 五 構成
 - 六 成立
- (訳注本) 略語、序文、凡例、解題、『ホージャ・アフラルのマカーマート』訳注、人名索引、地名索引。解題は以下に示すように四章に分けられる。

- 一 ホージャ・アフラルの誕生
- 二 修行時代
- 三 資産
- 四 死

また訳注そのものも以下のごとく三章に分かれている。

『ホージャ・アフラルのマカーマート』訳注

第一章 諸奇蹟の叙述

第二章 イーシャーンさまの親族の話

第三章 イーシャーン様の教友たちの話と高貴なる集会で著者が聴いたいくつかのお言葉

校訂本の解題では本書校訂にかかわる諸問題が検討されている。訳注本の解題では、翻訳の理解に資するため、ホージャ・アフラルの誕生、修行時代、資産、死に関して、上述四種のホージャ・アフラル伝のうち(三)『ラシャハート』の記述が翻訳・提示され、本聖者伝『マカーマート』との性格の違いが指摘されつつ、本書の特徴がまとめられている。

以下に各解題に従って、本書に関する校訂・訳注者の考察・見解を簡単にまとめる。

著作名に関して。当聖者伝『マカーマート』は、チェホビチに従って *manāqib* と研究者の間で呼ばれてきたが、この語は三種

のタシケント写本を記載するカタログ中にもタシケント写本3にも見いだされない。さらにパトナ写本の見開きにも見える著作名がのちにつけられた書名であること、イスタンブル写本の見開きにも見える表題が書写されたときに書かれたであろうこと、ナウシヤーヒーによる校訂本で *Khawariq-i Adat-i Ahir* とされた本書の題名が書き出しの文言から取られたことが示される。また著者以外の人物の手になる序文にもコロフォンにも著作名が見当たらないことから、当聖者伝には「おそらく、もともと名称がつけられていなかったであろう」と結論が下される。結果、著作名として、タシケント写本1および2のカタログにおける仮称とイスタンブル写本の見開き表題から *Maqam-i Khawaja Ahir* が採用された。

写本に関して。校訂本作成のために使用された五種の写本のそれぞれの特徴が詳細に検討され、系統関係が考察される。タシケント写本1については、おそらく一五三三年から一五四〇年の間、すなわち原本執筆後「きわめて早く写された貴重なもの」であること、しかし、二箇所以後世の補修部分があり、その部分がイスタンブル写本から写されていること、さらには欠落部分が存在することが指摘され、「この写本に系統的に繋がる写本は現存していない」ことが明らかにされる。補修部分・欠落部分が存在するタシケント写本1は不完全な写本であるが、母音点、コンマ・ピリオドが付されているため、多くの貴重な情報を含むという事実も指摘されている。「一五六二年にカーブルで献呈される以前に書写された」パトナ写本はタシケント写本2と同系統の写本であることが明らかであると記される。一五七四年から一五七五年に

かけて書写されたイスタンブル写本からは、タシケント写本1の補修部分およびタシケント写本3が写された。十六世紀に写されたイスタンブル写本は、タシケント写本3が写された一八三三年までは中央アジアにあつたと考えられる（その後イスタンブルで所蔵されるにいたつた理由は不明。）加えて当写本には誤り・写し漏らしが多いことも指摘されている。十八世紀に編纂されたとされる集成本の一部をなすタシケント写本2は、上述のパトナ写本とともに、タシケント写本1に大変近く、しかもタシケント写本1の欠落部分がない「元写本（原本の可能性もある）の系統上にある写本である」とされる。当写本では表現の書き換えや単語の置き換えが行われていること、それによつて理解が容易になっていることも述べられる。タシケント写本3は前述のごとくイスタンブル写本を写したものである。以上の考察から、凡例で述べられているように、タシケント写本1を底本とし、底本の欠落部分をパトナ写本で補い、さらに両写本の欠落部分をイスタンブル写本で補うという校訂の方針が決定された。

刊本に関して。当校訂本以前に出版されたアーレフ・ナウシヤーヒーの校訂本にみられる底本決定などに関わる不備が、イスタンブル写本とパトナ写本の二写本だけに基づいて校訂がなされたことに由来するであろうことが述べられるとともに、校訂の誤りの若干例が具体的に指摘されている。

編著者に関して。まず聖者伝の著者がマウラーナー・ムハンマド・カーディーであるという説の誤りが指摘され、マウラーナー・シャイフなる人物に関する情報が整理される。聖者伝に記される最後の事件と一五七〇年にかかれたナクシュバンディー教

団に関する系譜『シルシラ・ナーマ』での死亡についての記述から、マウラーナー・シャイフは、一五〇九年四月二十一日以降に起こった最後の出来事を記述してから、シャイバーニー・ハーンがサファヴィー朝のシャー・イスマーイールに敗死した一五一〇年十二月までの間に死去したと考えられる。また「当聖者伝の記述の独自性」が、マウラーナー・シャイフがホージャ・アフラールから任されていた「農業経営その他の世俗の重要な仕事」に係している可能性が指摘されている。パトナ写本にのみ見られるマウラーナー・シャイフ・アフマドなる編著者名は貴重な情報であるが、ほかの史料には一切現れないことから編著者名として採用されなかったことが、先にパトナ写本について解説した箇所同様に述べられている。

構成について。「一つひとつが完結した約二〇〇〇の逸話の集成」である『マカーマート』は、著者が多くの人から聞いたホージャ・アフラールと彼の親族、高弟に関する情報およびホージャ・アフラール自身から聞いた教説・訓話という、情報源・内容が異なるものから成り立っている。訳注本文で本聖者伝が「奇蹟譚・言行録集」と表現されている所以であろう。前者に関しては、著者自身が体験したことと伝聞の二種に分かれるが、叙述からははっきりそれとわからない箇所も存在する。大半が短く完結しているそれぞれの逸話は、伝聞であることを示す言葉あるいはホージャ・アフラール自身が語ったことを示す言葉によって始められ、写本でも色を変えらることで明瞭に示される。全体は内容に従って三グループに分けられ、それぞれに章題が付されている。それらは上述した訳注本文の章分けに見られるとおりであるが、

第二章の表題が写本によって異なり、「写本によっては章題として明確に意識されて」いないこと、第三章の表題が写本によって欠落していることにも言及される。また後書きに相当するものはない。

成立について。以上の考察から、本書の「失われた原本の成立」は以下のように推定される。著者のマウラーナー・シャイフは、弟子としてホージャ・アフラール自身から直接聴くことができた「教説や言葉のメモを持っていた。」また「スーフイズムの教義や弟子の指導の仕方」以上に「聖者の奇蹟に強い関心を持っていた」ために、ホージャ・アフラールの「政治的な活動に関する逸話やエピソードを師の奇蹟譚として集め記録していた。」逸話の収集は「世俗の仕事」を遂行する過程でもなされ、とくに師の死後にこれらを記録する必要を強く意識した。ティムール朝の滅亡、ホージャ・アフラールの二人の息子の「殉教」のち、書き溜められたメモやノートから「漠然と上述の三部構成で記録をまとめ、著作の草稿を書いていた」マウラーナー・シャイフは、しかしながら、書物としての完成を見ることなく死去した。この草稿には、書名・序文・後書きもなかったが、一五二〇年頃に、「冒頭の短い序文を書いた人物によって一書として編纂された。」章題も著者によるものではなく、編纂者あるいは写字生によるものとされる。本書の構成自体も編纂者によるという可能性は、本書中にその人物の痕跡が序文以外には残っていないことから採用されない。また本聖者伝の著者が、著述年代において先行する聖者伝——ほかの三種のホージャ・アフラール伝（著述年代はそれぞれ（一）一四九〇—一五〇〇年の間、（二）一五〇四年

頃、(三) 一五〇四年であり、(二)は(一)(二)を参照して書かれた)——を参照した形跡がないことも指摘されている。最後に、本書がほかの聖者伝、諸資料にない独自の情報を多く含むこととの価値——弟子以外の語るホー ज्या・アファールの諸奇蹟や、著者が「仕事」によって得たと思われるホー ज्या・アファールの私有財産にかんする情報の価値——が強調されている。

訳注本解題で引用・提示される『ラシャハート』の記述との比較から導き出されることは以下のとおりである。『ラシャハート』が「伝記的情報を年代的に整理し」、「日時・地名を正確に述べ、客観的に事実を伝えようとしている」のに対して、本書『マカーマート』は「説明的な記述が一切なく、ホー ज्याまたは第三者の語る話の集積」であり、「伝記的な形態をまったく取つて」おらず、本書中の「回想は、むしろ主観的、すなわち語り手が事件をどのように捉えたかに重点が置かれている場合が多い。」この理由は「編著者たちの環境や教育や嗜好の違い以外に、逸話を3章に分けたことを除いてはほとんど編纂がなされていないこと」に求められる。著者によるメモやノートが、「偶然そのまま、内容による3分類のみを経て書物としてまとめられてしまったために、状況説明を書き加えることによって逸話の意味を明確にしていくといった聖者伝編纂に必要な作業」がほとんどなされないまま「一書として書き写されてしま」い、それゆえ「一般的な伝記聖者伝やお言葉集聖者伝とは、内容・形式ともかなり異なつた「聖者伝」として残され」たと結論づけられている。

各写本を比較検討した校訂本の解題における考察はまことに堅実・明快で、これまでに校訂をおこなつた経験をもたない評者は、

実際の校訂作業がいかにしてなされるものであるかをここから多く学ぶことができた。また訳注本の解題で示された「ラシャハート」と本書との比較も、聖者を記述するとはどういうことなのか、あるいは聖者はどのように記述されているのかといった問題を含む聖者伝ジャンルのあり方のように関心を抱いている評者には、大変に興味深かった。とくに当聖者伝の内容・形式面での特徴が書物編纂の過程で決定づけられたとする見解には、著者の意図だけでなく書物が出来る上がる過程の重要性が指摘されており、傾聴に値すると思われる。

最後に、著者の聖者伝作成の意図に関して若干の所感を述べておきたい。聖者伝はそれが客観的な記述を目指そうとするものであれ、荒唐無稽な話に終始するものであれ、対象となつた聖者を称揚する目的で記述されるものであろう。またそのことは、対象となつた聖者を権威づけるとともに、何がしかに対して対象を正当化することになる場合もある。スーフィズムをイスラム信仰のなかに位置づける営為がなされた十・十一世紀の各種聖者列伝がこうした意図の下に編まれたことはほぼ通説であらうし、十六・十七世紀のオスマン朝下で、ハルヴェティイ(ハルワティイ)系の聖者伝が大量に編纂され始めた理由の一部を、教団に対する反感および批判への防御・応答に求める研究も存在する。ホー ज्या・アファールの死後三十年ほどの間に四種ものホー ज्या・アファール伝が執筆されたのはいかなる理由によるのであろうか？ある特定の理由によらず、聖者に対する崇敬の念から聖者伝が編まれることは当然ありえるので、ホー ज्या・アファール自身が驚嘆すべき影響力を持ち、崇敬を一身に集めたことが聖者伝編纂の

第一の原因であつたらうことは容易に想像できる。ただ莫大な世俗財産にたいする反感への回答と思われる、聖者伝本文中に見られる世俗財産を所有していることの意義を伝える逸話には、奇蹟を伝えることが第一の目的であつたとしても、批判からホージャ・アフラールの名誉を守らうという態度が無意識にでも表出しているとはみなすこともできるだろう。さらには、ホージャ死後の状況、ティムール朝崩壊後の情勢も著者に何らかの影響を与えた可能性はあると思われるのだが、例えば、シャイバーニー・ハーンによるホージャ・アフラールの息子ホージャ・ヤフヤーと彼の子供たちの虐殺は、当時のナクシュバンデー教団、とくにホージャの近くにいた人々にどのように捉えられたのであろうか？

以上、評者の関心に従つて、なんらかの結論がすぐさま得られる類のものではない、校訂・翻訳そのものとは関係のない妄言を連ねた。校訂・訳注者は、本書の出版にいたつた動機を、「この著作中の重要な部分を他史料とつきあわせて歴史的事実を論証し、それを論文にまとめていく作業よりも、この著作全ての翻訳によつて、中央アジアの聖者伝とはいつたどのようなものであるのかということ、その中でホージャ・アフラールという聖者がどのように描かれているかということを示すことの方が急務であると思うようになった」と述べておられる。「マカーマート」は「研究者の間においてさえその存在も知られていなかった」のであるから、単なる紹介に留まらず、他分野の研究者も容易に参照できるように、校訂本を作成し、翻訳をおこなうという大変に労の多い仕事をなされたことは、われわれにとつて何物にも変えがたい恩恵といえるだろう。また、かつて「われわれが行わなければなら

ないのは、欧米の論文・研究書を読むことだけでなく、写本や文書などの原資料を収集し必要であれば出版し、翻訳することなのである。翻訳によつて自らの文化の一部となった原資料の有用性は計り知れないことは、先学たちによつて証明済みである^⑥」とも述べられた。文献を扱つて研究をおこなうものにとつてはまさしく至言であろう。本書の校訂・訳注者は自らの言葉通りにそれを実践された。敬意を払うに値する業績たる所以である。

① 「教団」としてのタリカを巡る問題は、堀川徹「タリカ研究の現状と展望—道、流派、教団—赤堀雅幸他編『イスラームの神秘主義と聖者信仰』（イスラーム地域研究叢書7）東京大学出版会、2005、pp. 161-185.」に簡潔にまとめられている。

② 川本正知「ホージャ・アフラールとアブー・サイード——ティムール朝における聖者と支配者——『西南アジア研究』25、1986、pp. 25-50；「ホージャ・アフラールのワクフ文書」『人文学報』63、1989、pp. 53-68；「ナクシュバンデー教団」『社会的結合』（シリーズ世界史への問い4）岩波書店、1989、pp. 167-199；「ホージャ・アフラールの不動産登記文書——五世紀中央アジアの私有財産所有について」『東洋史研究』50/3、1991、pp. 373-400；「ナクシュバンデー教団研究の基礎資料について——(1) ホージャ・アフラール（1404-1490）」『中央アジアにおける共属意識とイスラムに関する歴史的研究』（平成一一一三年度科学研究費補助金基礎研究(A)(2) 研究成果報告）2002、pp. 19-34。

③ 川本、前掲「ナクシュバンデー教団研究の基礎資料について——(1) ホージャ・アフラール（1404-1490）」pp. 24-30；間野英二「ナクシュバンデー教団に関する最近の諸研究について」『パースル・ナーマの

- 研究 IV 研究篇 『バブルとその時代』松香堂、2001、pp. 461-462.
なおチエホウィッチの研究を紹介した後者は、四種のホージャ・アフレール伝のうち、(一)のタイトルを *Masmû'at* としている。
- ④ John J. Cury, "The Growth of Turkish Hagiographical Literature within the Halvetî Order in the 16th and 17th Centuries," *The Turks: 3 Ottomans*, Hasan Celal Güzel, C. Cem Oğuz, Osman Karatay (eds.), (B5判 一五五頁 索引一三三頁 二〇〇五年十二月 東京外国語文化研究所)
- ⑤ 川本、前掲「ナクシュバンディー教団研究の基礎資料について——(1)ホージャ・アフレール (1404-1490)」p. 20
(B5判 一五五頁 索引一三三頁 二〇〇五年十二月 東京外国語文化研究所)